３月継続講座を３月９日(土)　１３：３０～１５：３０に開催しました。

会　場　　愛知文教大学　２０１教室

テーマ　「子どもの発達障がいを疑う前に」「まずは応用行動分析の手立てで」

講　師　学び合う学び研究所フェロー　中川　行弘 先生

着想という言葉は今日初めて聞きました。授業をデザインしていく中で、着想の「早飯、早食い、大食い」を考慮するべきかしないべきかという点で、論点が分かれるところだと思います。

例えば、高機能自閉症などの生徒の場合で個別対応をすると仮定した時に、彼らには「早飯と大食い」が有効ではないかと考えます。高機能自閉症の場合、ある特定の教科や分野で素晴らしい才能を開花させることがあります。その時に「早飯」をさせ、自己有用感を高める指導は有効と考えます。

また、彼らは反復的な学習をすることによって、安心感を覚え、学習が定着することを考えると、「大食い」をさせ、問題演習をたくさんさせることも必要かと考えました。いずれにせよ、目の前の生徒の実態を踏まえ、うまく組み合わせて使うべきだと思います。私は英語の教員ですが、小中の時代は、公文に通っていました。私のそこでの英語の学習スタイルは３つを全て組み合わせたスタイルだったため、今では英語教員として、ご飯が食べられるようになりました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、特別支援教育を標準装備にということです。本日はありがとうございました。

中川先生と初任者の先生方との対話からのコンセプト、環境構成、授業デザインから、教員としてもっておきたいエキスをたくさん教えていただきました。

特別な支援が必要な子どもはたくさんいますが、その子に特化するのではなく、誰にでも同じように指導していくことが大切だと思いました。また、その環境を教室全体で作っていくことも大切だと思いました。全ての子どもが安心して学べる環境を作ることを大切にしていきたいと思いました。

継続講座の２回目でした。今まで、なぜこの生徒が学習に集中できないのかを、研修した経験がなかったので新鮮でした。抽出児童に着目して、その子の学習の変遷をたどった経験はありますが、その児童に対して、指導者はある解決策で指導してみようという見通しがありました。今回、見せていただいた子どもたちは、見通しがなく、先生も困惑していると思いました。

１回目でビデオを見せていただいた小学校４年生の男子は、半年後のビデオで見違えるほど成長していました。４年生の担任の先生による影響があるかもしれませんが、１年生から３年生まで、彼に関わった先生方の努力の上に築かれたものだと思います。１年生から３年生まで、教科書を開くことはなかったそうですが、その間に、学校の先生に対する信頼を築いてきて、ようやく４年生で、学習するようになったのではないかと思います。

以前、大学で指導した留学生が、祖国の小学校の先生が、どれくらい無責任であるかを話してくれました。国民の識字率は低く、小学校を卒業しない子どもたちがいるそうです。卒業を前に、日本の大学に入って、初めて先生は頼ってもいい存在だとわかりましたと、言ってくださいました。教育の基本は、頼ってもいいという信頼だと思ったときです。

日々の指導の中で、すぐに効果は出ないことの方が多いと思います。また、反抗的な態度に出て教師の気持ちを荒らしてしまう子どもたちもいます。でも、温かく接し、長い目で、いつかを信じていくことが大事だと思いました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、子どもの発達障がいを疑う前に、特別支援教育を標準装備にということです。 本日視聴した教室の子どもたちに、三か月という短期間にあれほどの大きな変化が生まれたことに大きな驚きを覚えました。それは、どの教室も特別支援教育の視点を標準装備している学校だから生まれた変化・成長であると感じました。 勉強に自信がもてないということが「自分は価値がない」と思わせてしまう。「やってもどうせ無駄」「頑張っても報われないから意味がない」という感情から伏せ寝している生徒が三月後のグループで別人のように自分の考えを伝えている。 「わからないから教えてほしい」「難しいから見てほしい」と人に援助を要請する社会的スキルをもつことの大切さが自覚できた子どもに起きる変化である。「聴いてもバカにされる」「聞いたら怒られるに決まっている」という思考が姿を消し、教室を安全基地にできるのは教師の重要な役目であると強く感じました。 どの学校にも、思春期をむかえる中学生には、やる前から失敗を過度に恐れ、失敗したくないからと挑戦をやめてしまう姿をよく見かけます。 本日、みなさんと共有できた、「授業づくり・学級づくりのコンセプト・環境構成・授業デザイン」を再度読み返しながら明日に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。